

語彙論から見た形容詞

玉村文郎

はじめに

日本語で「形容詞」と呼ばれる語類は、語形と活用の2点において、明確な分類のほどこされる語類である。そして、こうした日本語の形容詞の外形上の特徴は、多くの外国語における形容詞が外形的にはきわめて多様であることとひき比べると、対照言語学的にも、大きな特徴と見られるべきものであると考える。

筆者は先に形容詞と形容動詞語幹の語音構造上の差異について考察したが、それは^①どちらかと言えば、語彙教育に資する実践的な分析であった。小論では、いわゆる「形容詞」について、語彙論的に問題となる事項をとりあげ、概括的な考察を加えることにする。

I 語彙構造の中の形容詞

I-1 形容詞の語義と語数のかかわり

一体、形容詞は「動詞形容詞の意義が外延において大きい——即ち比較的単純で曖昧な——ことは独り日本語に限られたことではない。」との指摘がある^②とおりに、諸品詞の中でも、名詞類とはまたちがった使用の中にある語類であると見られる。言い換えれば、名詞類が意味の広狭、抽象具象の段階に応じ、また科学・技術・思考の広がり^③と深まりに応じて、語数が自然に増加する運命にあるのとは対照的に、いずれの言語においても、動詞や形容詞は、さして多くない限られた数の語彙で事足りるということである。

さて、日本の古典語の主要品詞別語数については、次のような報告がある。

表1 万葉・枕・源氏・徒然4作品の総語数と品詞別内訳およびその百分率^③

	4 作品 総 計	%
名 詞	13,007	53.8
形 容 動 詞	810	3.4
形 容 詞	1,350	5.6
動 詞	7,346	30.3
そ の 他	1,648	6.8
計	24,161	

表2 古典4作品共通語彙の品詞別内訳とその百分率^④

	4 作品 共通 語	%
名 詞	369	45.3
形 容 動 詞	13	1.6
形 容 詞	72	8.8
動 詞	315	38.7
そ の 他	46	5.6
計	815	

また現代語については、総合雑誌の用語の分析がある。(次ページ表3)

語の認定のしかたには、調査のあいだに異同があって、上掲の表1, 2と次ページの表3の数値を機械的に比較するのは正しいことではないが、日本語においては、動詞と形容詞のあいだに、語数の面でも使用率の面でも、大きなひらきのあることが認められるし、両者を合計しても、なお名詞の語数・使用率に及ばないことも推定できるところである。名詞類に比して、動詞・形容詞が、語数・使用率の両面でいちじるしく少なく、かつ低いという現象は、何に由来するのであろうか。その事情の一つは、明らかに先に紹介した指摘「動詞形容詞の意味の広さ」と関係があるはずである。しかも、こういう語数や使用率に見られる名詞優位傾向は、ただに日本語内の現象であるだけでなく、多くの言語に見られるかなり普遍的な事実と考えられる。それは、何種類かの語彙調査によっても、語数を増せば増すほど、使用順位を下げれば下げる

表3 総合雑誌用語の品詞別分布^⑤

	延 べ 語 数		異 な り 語 数	
	語 数	%	語 数	%
名 詞	76,134	65.4	13,144	83.7
コソアド語	4,562	3.9	53	0.3
副 詞	3,090	2.6	357	2.3
連 体 詞	257	0.2	8	
接 続 詞	898	0.8	22	0.1
感 動 詞	183	0.2	61	0.4
動 詞	26,382	22.6	1,818	11.6
形 容 詞	2,750	2.4	232	1.5
付 属 語 (一 部)	1,973	1.7	17	0.1
計	116,235		15,712	

ほど、名詞類が多く並び、他の品詞の現われる率が低くなること、また、上位100語とか、上位500語とか、上位1,000語とかの中には、動詞や形容詞の並ぶ率が相対的に高いことなどから、確かめられるところである。

しかし、動詞と形容詞を一括して名詞と対比することから、今一步進めて、動詞と形容詞とを対照して眺めれば、どういうことになるであろうか。ふたたび語彙調査に目を通してみよう。古典語としては、形容詞は動詞の $\frac{1}{2}$ に至らず、同共通語彙では $\frac{1}{2}$ に足りない。現代語としては、延べ語数では $\frac{1}{2}$ 以下、異なり語数でも約 $\frac{1}{2}$ という状態である。外国語の例でも、中国語基本語彙3,000語中^⑥、形容詞437語に対して、動詞969語で、 $\frac{1}{2}$ 以下であり、英語基本語彙533語中^⑦、形容詞94語に対して、動詞170語という状態である。

ことに、使用範囲・使用頻度を基礎にした重要度順に語を排列した場合、第100位まで・第200位までにはいる形容詞・動詞の数は表4のようになり、一層形容詞と動詞の語彙の性格の違いが明瞭になる。動詞の方が形容詞よりは語数がうんと多いのであるが、少数の動詞は多義的であり、外延が大きく、形式語化していると考えられるわけで、あたかも「こと」「もの」その他の抽象度のきわめて高い形式名詞と似た機

表4 第100位・第200位までの形容詞と動詞の数

	第100位までの語数		第200位までの語数	
	形容詞	動詞	形容詞	動詞
日本語 ^⑧	3	28	6	46
英語 ^⑨	12	21	34	53
ドイツ語 ^⑩	6	32	31	63
フランス語 ^⑪	8	21	19	53

能をもっていると言える。また、印欧語では、日本語や中国語とは異なり、形容詞がそれ自身では述語となることはないから、ほかならぬ動詞が文の直接構成成分となるために、特定の基本的な動詞の使用範囲や使用度数がきわだって広く高いことにも必然性があるわけである。ところで、今一つ、形容詞について注目しなければならない事項がある。それは、使用範囲が広く、使用度数の高い動詞が、諸言語を通じてほぼ60%の一致度を見せるのに対して、同じような使用の下にある形容詞が、言語ごとに大きな出入りを見せて、一致を見ないという点である。

表5 第100位までの形容詞（英語以外は頻度順）

日本語	英語	ドイツ語	フランス語
ナイ	all	(ein)	autre
ヨイ	any	all	bon
(一的)	good	groß	grand
(一タイ)	much	mehr	petit
オオキイ・ナ	some	ganz	tout
	great	weit	quelque
	little	viel	beau
	long		seul
	many		
	more		
	new		
	old		
	such		
	*第105位までをあげた		

これらのことは、形容詞と動詞のあいだに文法上の機能の差のほか、語彙的な差のあることを示している。動詞が名詞とともに、きわめて品詞性の高い語類であるという事実と、形容詞が（添え物のように考えられる印欧語の場合は言うまでもなく、）一般的に名詞・動詞よりは品詞性において低いものである^⑩だけに、個別言語ごとに、具体的使用の様相を異にするのであろうと考えられる。形容詞が、意味記述の面でも動詞とちがって、多くの困難点を伴う^⑪のは、その心情性・感覚性という不可測性に起因していると考えられ、そこにまた、個別言語ごとに異なった（意味の）形容詞が使用される契機がひそんでいると見られるのである。

I-2 日本語の形容詞

ところで、こうした「形容詞」の、日本語における問題を提起したものに、次のような谷崎潤一郎と柳田国男の指摘がある。

「又櫻の花の咲いてゐる花やかな感じを云ふにも、日本語では『花やかな』と云ふ形容詞しか思ひ出せませんが、漢語を使ってよいとなれば、爛漫、燦爛、燦然、繚亂等、まだ幾らでもあるであります。…」(「西洋の文章と日本の文章」(『文章讀本』昭和9年))

「…日本人の殊に宿命的に苦しめられて居るのは、何は置いても形容詞の足りないことである。此點にかけては佛蘭西は羨んでもいいと思ふ。(中略) 歌を作る者やよい文章を書かうとする者は、無意識に形容詞を使はぬ様に骨折って居る。…」(「形容詞の缺乏」(『新語論』昭和9年))

「…形容詞は元は甚だ数少なく、この頃著しい増加の趨勢を示すといふのみで、今とても決して豊かではないやうである。少なくとも標準語で書き又は談らうとする者は、我も人も非常に不自由を忍び、或は色々無くしてすませる方法を講じて居るのである。…」(「形容詞の近世史」昭和13年)

とくに、柳田国男は、いろいろな場で、日本語の(とりわけ標準語の)形容詞の数の少ないことを歎き、克服のみちを示唆して訴えている。後者の当為に関する問題はさておき、存在としての形容詞の実態ははたしてどうであろうか。(次ページ表6参照)

調査により、語の切り方、単位の立て方に相当大きなちがいがあがるが、1.8%~4.3%というのが形容詞の全語数に占める割合である。

しかし、「日本語は形容詞が少ない」と結論づけるためには、なお外国語の状況に照らして考えてみる必要がある。(次ページ表7参照)

表6 基本語中の形容詞の数と百分率

	語 数	形容詞数	%
雑誌 90 種	1,207	52	4.31
分類語彙表	32,600	590	1.81
同上中心語彙 ^⑭	7,000	176	2.51
国語教材(大西) ^⑮	9,428	196	2.08

表7 外国語における形容詞の数と百分率

	語 数	形容詞数	%
英 語	1,500	240	16.0
ド イ ツ 語	1,533	230	15.0
フ ラ ン ス 語	1,515	253	16.7
中 国 語	3,000	437	14.6

これは、もちろん言語構造を異にし、品詞認定の方法もちがう言語間の比較であるため、あくまでも概括的かつ便宜的なものであるが、前掲表6の日本語の形容詞の率を大きく上まわっていることがわかる。しかし、外国語には形容詞のほかには形容動詞というような別個の語類があるわけではないから、日本語の方の計量には、形容動詞を算入する必要がある。そこで形容動詞を加えて、形容詞類としてまとめた数値を出すと、表8のようになる。

表8 基本語中における形容詞・形容動詞の数と百分率

	語 数	形容詞数 a	形容動詞数 b	形容詞類 a + b	%
雑誌 90 種	1,207	52	43	95	7.88
分類語彙表	32,600	590	1,242	1,832	5.62
同上中心語彙	7,000	176	261	437	6.24
国語教材 (大西)	9,428	196	235	431	4.57

いずれの語彙調査によっても、表7の外国語における形容詞率よりは低いことがわ

かり、彼我の比較では、ほぼ半以下にとどまることが知れる。

なお、形容詞・形容動詞のほかに、わが日本語において連体修飾機能をもつばらになっている連体詞を忘れてはならないが、これは語数が僅少（「雑誌90種の用語」では23語、「総合雑誌の用語」では8語）であるため、上掲の数値そのものが大きく変わることはないのである。

ともかく、品詞としての形容詞に属する語が、かなり少ないことは明白になった。

以上、外国語の語彙調査をも参照した結果、日本語の形容詞（または形容詞類）の少ないことを指摘した前記谷崎説や柳田説にはまちがいのなかったことが明らかになった。

I-3 形容詞に代わるもの

しからは、日本語の形容詞が、なぜ絶対的にも相対的にも少ないのであろうか。この問いに直接答えることには慎重でなければならないが、形容詞が少ないという事実は、少ない形容詞でともかく日本語が機能し、一往の表現目的が果たしているからと考えるしなければならないであろう。では、なにゆえに、わが日本語は数少ない形容詞で表現機能を充足しえているのであろうか。

いうまでもなく、日本語の形容詞は用言の一つとして、文の成立に直接かかわる陳述力をそなえた語類であるが、この点では印欧語とは根本的に性質を異にしている。しかし、形容詞のいま一つの重要なはたらきは、名詞類（体言）に対する修飾限定成分（連体修飾語）となることである。印欧語では、前者の陳述力を欠いているために伝統的に文の成分としては、名詞・動詞よりは低次のものと考えられてきたことは、先に述べたとおりである。形容詞には、なお補語格に立って連用修飾成分となるはたらきもある。こういう3種の文法的な機能を持ち、事物の属性を超時間的にとらえて表現する形容詞の代理となる語詞は、形容動詞である。そこでまず形容詞の機能を補完するものとして、形容動詞の存在することに目を向けねばならない。

I-3-1 形容動詞による補完

形容動詞の形容詞に対する補完の実態を眺めるために「分類語彙表」の「相の類」の語数を調べてみた。結果は表9のとおりである。

表9 分類語彙表「相の類」の形容詞・形容動詞の分布

見出し	分類番号	全語数	形容詞	形容動詞				*中心形容詞	*中心形容動詞			
				和語	漢語	洋語	計		和語	漢語	洋語	計
こそあど	3.100	108	1	1	6		7		1	4		5
真・正	3.101	41	1	2	8	2	12	1	2	2		4
関係	3.110	25	1	2	8		10			2		2
関係の仕方	3.111	30		1	3	1	5					
相互・異同	3.112	54	3		5		5	1		1		1
整い方	3.113	43		9	11		20		2	1		3
さながら	3.114	24	4					3				
在不在	3.120	74	5	2	4		6	3	1			1
必然性	3.121	38	4	1	7		8			2		2
可能性	3.123	30	16		8	1	9	5		3		3
繁簡	3.130	42	1	4	20		24		2	9		11
普通・非凡	3.131	49		3	10	1	14			5	1	6
特別・異様	3.132	45	6	3	19	1	23	3		10		10
良・不良, 適・不適	3.133	87	9	5	28		33	6		5		5
調子・出来	3.134	76	6	6	43		49	3	1	18		19
激力	3.14	60	22	1	22		23	9		5		5
変化・動き	3.15	258	2	2	14		16		1	3		4
時	3.160	69										
すぐ・次第になど	3.161	35										
一度に・再び・毎度など	3.162	57		2	2		4			1		1
過現未	3.164	60										
まだ・もう・もっと・また	3.165	79										
久しい・若い・早い	3.166 ₀	28	9		1	1	2	4				
新しい・古い	3.166 ₁	40	7	1	6	2	9	2	1	1	1	3

翌・次	3.167	7	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
関係位置	3.171	10	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
場所	3.172	9	/	/	3	1	4	/	/	/	/	/	/	/
形・丸い・平たい・荒らい・まっすぐ・水平など	3.180~2	107	13	11	14	2	27	6	3	4	1	8		
しなやか・きれぎれ・ふさふさなど	3.183	18	1	3	/	/	3	/	1	/	/	/	1	
長い・広い	3.192 ₀	80	22	4	14	/	18	10	/	2	/	2		
厚い・太い・大きい	3.192 ₁	73	12	9	18	1	28	8	5	1	/	6		
重い・軽い	3.193	12	5	1	2	1	4	3	/	1	1	2		
速い・遅い	3.194	60	9	3	9	1	13	4	1	2	/	3		
多い・少ない	3.195	115	7	4	15	/	19	6	2	3	1	6		
ひとり・みんな	3.198	73	/	/	/	3	3	/	/	/	2	2		
限り・全く	3.199 ₀	27	1	1	6	1	8	/	/	2	/	2		
くらい・ほど	3.199 ₁	13	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/		
およそ・かつがつ・最も・もっと	3.199 ₂	55	/	/	1	/	1	/	/	1	/	1		
かなり・はなはだ・あまり	3.199 ₃	81	1	1	13	/	14	1	1	4	/	5		
抽象的關係 小計		2,192	168	82	320	19	421	78	24	92	7	123		
意識・感覚	3.300	104	19	2	14	1	17	2	/	3	/	3		
驚き・楽しい・快い	3.301 ₀	53	18	1	13	/	14	7	/	5	/	5		
苦しい・悲しい・こわい	3.301 ₁	77	30	2	19	/	21	8	1	/	/	1		
はずかしい・ほしい・くやしい・ありがたい	3.301 ₂	46	33	/	5	/	5	7	/	1	/	1		
好き・きらい・かわいい・にくらしい	3.302	82	54	7	6	/	13	11	5	2	/	7		
しくしく・にこにこ・ぶりぶり	3.303	28	/	1	/	/	1	/	/	/	/	/		
かしい・おろか	3.304	69	11	6	29	/	35	/	/	4	/	4		
じょうず・へた	3.305	47	6	5	15	/	20	1	2	4	/	6		
くわしい・たしか・あやしい	3.306	90	7	8	35	1	44	4	2	8	/	10		
意味	3.307	22	/	/	16	1	17	/	/	/	1	1		
眼	3.309	15	/	/	2	/	2	/	/	/	/	/		

ことば	3.31	104	12	9	12	1	22	2	2	2	2	
風俗	3.330	127	15	10	60	14	84	1	2	7	3	
禍福・世情	3.331	19	1	4	7	11	11	3	3	3	6	
仕事	3.332	19	2	1	1	1	1	1	1	1	1	
衣食住	3.333	14	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
吉凶・神秘	3.335	20	5	1	9	10	10	1	1	1	1	
身のふるまい	3.339	61	6	4	5	9	9	1	1	1	1	
身上	3.340	28	2	1	1	1	1	1	1	1	1	
偉い・けち・すごい・不屈	3.341	78	21	9	31	40	40	1	2	2	2	
純情・正直・慎重	3.342	49	4	9	33	42	42	2	5	7	7	
がんこ・率直・気軽	3.343	39	3	7	24	31	31	1	1	1	1	
強気・勇敢・大胆	3.344	70	3	7	33	40	40	4	4	4	4	
快活・柔和・勇猛	3.345	69	15	7	26	4	37	6	2	1	3	
みずから・あえて・ぬげぬげ	3.346	95	8	8	16	16	16	4	4	4	4	
熱心・努力	3.347	77	5	2	8	10	10	2	2	2	2	
細心・勤勉・けなげ	3.348	46	5	13	19	32	32	1	1	1	2	
交渉・交際	3.35	16	1	1	5	6	6	1	1	1	1	
公式・公平	3.360	33	9	1	10	10	10	3	3	3	3	
ていねい・親切(対人態度)	3.368	86	22	7	49	56	56	2	10	10	10	
経済	3.37	95	10	3	42	45	45	3	2	15	17	
精神および行為	小計	1,778	310	133	537	23	693	58	26	75	14	115
光	3.501	69	7	10	9	19	19	5	4	3	7	
色	3.502	55	24	5	8	13	13	8	2	1	3	
音	3.503	188	9	6	6	12	12	6	2	1	3	
におい	3.504	15	11	1	1	1	1	1	1	1	1	
味	3.505	30	19	1	5	6	6	7	1	1	1	
材質	3.506	62	14	2	16	18	18	4	1	3	4	

水分	3.513	37	1	/	1	/	1	/	/	/	/	/
気象	3.515	47	15	6	5	/	11	6	1	/	/	1
火	3.516	17	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
地	3.52	12	/	/	8	/	8	/	/	/	/	/
生・性	3.55	7	/	/	3	/	3	/	/	/	/	/
からだ	3.57	32	/	/	2	/	2	/	/	/	/	/
生育	3.581	34	4	3	4	/	7	1	/	/	/	/
健康	3.584	49	8	5	20	2	27	2	/	5	/	5
自然現象	小計	644	112	38	87	2	127	40	10	13	0	23

総 計

見出し	分類番号	全語数	形容詞	形容動詞				*中心形容詞	*中心形容動詞			
				和語	漢語	洋語	計		和語	漢語	洋語	計
相の類	3.	4,614	590	253	944	44	1,241	176	60	180	21	261

ただし、上の表の作成にあたっては、次の基準によった。

- ① 全語数欄の数字は、「大きい・な」のように両形のあげられているものも1単位として数えたものであり、またそれ以外の欄の数字は、それぞれ独立の別語として数えたものである。
- ② 形容動詞の認定には、「岩波国語辞典」の記述を参考にした。
- ③ 「…的」のような語より小さい造語成分は、全語数欄以外では算入しなかった。

「分類語彙表」は、同書「まえがき」によれば、約32,600語（または単位）を収載しているわけであるが、同書において「相の類」に分類されている語は、4,614語（単位）であり、うち形容詞590語、形容動詞1,241語、両者を合算すると1,831語となり、形容詞の約2.1倍の形容動詞が収載されていることがわかった。なお、同書において、標本使用度数7以上、使用率0.014パーミル以上の語には*印が付されているが、これらの中心的な語は同「まえがき」には7,000語と記されている。このうち、形容詞

は176語、形容動詞は261語で、両者を合わせると437語となることもわかった。

表10 形容詞・形容動詞の数と百分率

	32,600語につき		*7,000語につき	
	語数	%	語数	%
形容詞	590	1.81	176	2.51
形容動詞	1,241	3.81	261	3.74
合計	1,831	5.61	437	6.24

中心的な7,000語の中では、形容動詞は形容詞の約1.5倍になっていて、依然として語数上の優位に立っているが、率は低下している。つまり、語彙構造の基本的な部分では、形容詞と形容動詞の語数の差が小さくなり、使用度数の高い形容動詞はそう多くないことを物語っていると思う。

ちなみに和語と外来成分（漢語および洋語）の比率を考えるならば、漢語系の形容詞の数は僅少であるから、中心的な語彙7,000語の中では、外来成分よりも和語（形容詞と和語形容動詞）の方が数的優位に立つと考えていいであろう。

しかし、形容動詞1,241語のうち、和語形容動詞は253語（*60語）、漢語形容動詞は944語（*180語）、洋語形容動詞は44語（*21語）となっていて、総数の79.6%、約8割が外来要素であることは、実に顕著な事実である。（中心的な語261語の中でも、77.0%が外来要素である。）

形容詞590語に対して、和語形容動詞が253語もあるという事実は、もともと形容詞の少なさをおぎなうものとして形容動詞が機能していたことを示唆していると考えられる。漢語形容動詞が漸増する平安時代よりも前に、和語の内部においてすでに「一か」「一やか」「一らか」系語群を中心とした状態言が用いられていたことに注目しなければならぬし、そのことが、後に漢語形容動詞・洋語形容動詞が漸増ないしは急増する素地になったと考えられる。

I-3-2 連体詞による補完

日本語において、もっぱら連体修飾機能をなう語類として、連体詞があげられる。連体詞は、「現代雑誌90種の用語用字」では23語、「品詞別日本文法講座」では108

⑩語があげられているが、この中には「分類語彙表」において、「この」「こんな」などの*印を付された頻用されるコンアD系指示詞がふくまれているために、意義面では部分的にしか形容詞の補完機能を果たさないが、ひとり抽象的な関係指示の分野では特に高い補完度をもっていると言える。

I-3-3 その他の補完法

連体修飾格に立つ成分としては、これまでにとりあげてきた形容詞・形容動詞（ともにその連体形）・連体詞のほかに、動詞・助動詞の連体形と体言に格助詞「の」のついたもの（および、その延長として、体言＋助詞＋「の」、副詞＋「の」など）が考えられる。

このことは、印欧語や中国語の1個の形容詞の訳語としてあげられる日本語の語句を想起すればたいへん明瞭になる。

例えば、フランス語の“rude”に対して、新仏和辞典は、形容詞系訳語「苦しい、寒さの厳しい、粗い、きめの粗い、荒々しい、気むずかしい、味気ない、渋い、辛い、力強い、すばらしい、舌ざわりの悪い、柔味のない」をあげるほかに、形容動詞系訳語として、「不幸な、耳ざわりな、不作法な、頑固な、厳格な、生硬な」を、動詞（助動詞）系訳語として、「ざらつく、ごつごつした、骨の折れる、恐るべき、思うままにならぬ」を、名詞＋助詞系訳語として、「凸凹の、極上の、剛勇の」をあげている。このほかに、「ざらざらの、ごつごつの」のような副詞＋助詞系を考えることもできるが、予想しうる訳語の類型はほぼ列挙されていると言える。

谷崎潤一郎や柳田国男によって歎かれた形容詞の少なさは、実は、以上に見てきたような補完物の存在によって、（訳語の中にはもちろん若干の落ち着きのわるさを感じさせるものがあるにしても）おぎなわれていると見られるのである。柳田国男は、先に紹介したとおり、「新語論」の中で、フランス語の形容詞の豊かさまで引き合いに出して、日本語の形容詞の不足をかこっているのであるが、特定言語において、狭義の品詞として分類される形容詞の多寡自体が、ただちにその言語の表現の豊かさ貧しさや難易を測る尺度とはなりえないものであることは明らかである。たしかに、柳田国男の言うように、フランス語には形容詞が相対的には多いと言えるが、それはフランス語が、他の多くの言語において可能な〔名詞＋名詞〕式（例 くさはら、school bus）の名詞の裸形による直接的な連体法をかたく拒む言語であるため、年とともに増加する名詞に対して、極力忠実に派生形容詞をもたねばならないというところに理

由の大半があるわけである。もし、派生形容詞がつかられない場合には、〔(名詞+)
de (à, en など)+名詞〕(例 “chemin de fer” 鉄道) という形式によって名詞累積
構造をとることになる。従って、形容詞の多寡だけを単純に云々すること、まして表
現力の評価に結びつけることは正しいこととは考えられないのである。

II 形容詞の意味分布

前掲の表9をもとにして、さまざまな語彙論的な考察が展開されると思うが、いま
はごく大筋に限って、次のような事実だけを指摘しておこう。

(1) 形容詞がきわだって多い分野^⑧

可能性 (3.123), 長い・広い (3.192₀), 驚き・楽しい・快い (3.301₀), 苦しい
・悲しい・こわい (3.301₁), はずかしい・ほしい・くやしい・ありがたい (3.
301₂), 好き・きらい・かわいい・にくらしい (3.302), 偉い・けち・すごい・
不屈き (3.341), ていねい・親切(対人態度) (3.368), 色 (3.502), 味(3.505)

(2) 形容詞がきわだって少ない分野

こそあど (3.100), 真・正 (3.101), 関係 (3.110), 繁簡 (3.130), 変化・動き
(3.15), しなやか・きれぎれ・ふさふさなど (3.183), 限り・全く (3.119₀), か
なり・はなはだ・あまり (3.199₀), 禍福・世情 (3.331), 仕事 (3.332), 身上
(3.340), 交渉・交際 (3.35), 水分 (3.513) 《以上いずれも1語もしくは2語》

(3) 形容詞のない分野

関係の仕方 (3.111), 整い方 (3.113), 普通・非凡 (3.131), 時 (3.160), すぐ
・次第になど (3.161), 一度に・再び・毎度など (3.162), 過現未 (3.164),
まだ・もう・もっと・また (3.165), 翌・次 (3.167), 関係位置 (3.171), 場所
(3.172) ひとり・みんな (3.198), くらい・ほど (3.199₁), およそ・かつがつ・
最も・もっと (3.199₂), しくしく・にこにこ・ぶりぶり (3.303), 意味(3.307),
眼 (3.309) 衣食住 (3.333), みずから・あえて・ぬげぬげ (3.346), 公式・公平
(3.360), 火 (3.516), 地 (3.52), 生・性 (3.55), からだ (3.57)

(4) 形容詞の数が形容動詞の総数を上まわっている分野

さながら (3.114), 可能性 (3.123), 久しい・若い・早い (3.166₀), 長い・広い
(3.192₀), 重い・軽い (3.193), 意識・感覚 (3.300), 驚き・楽しい・快い(3.
301₀), 苦しい・悲しい・こわい (3.301₁), はずかしい・ほしい・くやしい・あり
がたい (3.301₂), 好き・きらい・かわいい・にくらしい (3.302), 仕事 (3.332),

身上 (3.340), 色 (3.502), におい (3.504), 味 (3.505), 気象(3.515)
 (5) 形容詞は、「相の類」^⑩84項目中、60項目において、形容動詞の総数よりも少ない。

以上のことから、(3.301₂), (3.302), (3.502) のように、形容詞の多い項目(分野)では、形容動詞があまりふえていない、と言えそうである。しかし、中には、(3.14), (3.192₀), (3.368) のように、形容詞も多いが、さらに多くの漢語形容動詞が用いられて語数を増加させている項目(分野)のあることがわかる。

なお、全体として「相の類」を3つに分けた場合には、形容詞対形容動詞の比は、

3.1	(抽象関係)	168 : 421
3.3	(精神および行為)	310 : 693
3.5	(自然現象)	112 : 127

となっていて、日本語の形容詞が抽象関係分野にうすく、自然現象分野にこく分布していることがわかる。

III 形容詞の語構成

さて、上に見てきたような日本語の形容詞は、語構成のレベルでは、どのような特徴をもっているのだろうか。

形容詞のなりたちには、およそ次のような2種14類が考えられるが、現代においてなお生産的な型は、ごくわずかであることに注目しなければならない。

A 派生法

- 1 動詞(未然形)+し(い) 勇ましい, ゆかしい
- 2 名詞+し(い) 大人しい, 女し, 公し, 無益し, 物し
- 3 接頭辞+形容詞 た易い, ひ弱い, か細い, す早い
- 4 名詞+い 茶色い, 四角い, ひもじい
- 5 名詞+接尾辞 女らしい, 際どい, 油(っ)こい, 理屈っぽい
- 6 動詞+接尾辞 忘れっぽい, はれがましい
- 7 状態言+接尾辞 おこがましい

B 合成法

- 1 名詞＋形容詞 心細い、毛深い、用心深い、腹黒い
- 2 動詞＋形容詞 ありがたい、見にくい、堪えがたい、ねばり強い、疑い深い
- 3 形容詞（語幹）＋形容詞 太短い、浅黒い、甘酸っぱい、せま苦しい
- 4 形容詞語幹×2＋し（い） 重々しい、痛々しい、弱々しい、若々しい
- 5 動詞（連用形）×2＋し（い） なれなれしい、はればれしい
- 6 名詞×2＋し（い） 物々しい、花々しい、男々しい、角々しい
- 7 漢語×2＋し（い） 美々しい、福々しい、毒々しい、麗々しい

なお、「品詞別日本文法講座」第4巻「形容詞・形容動詞」は巻末に「一ナイ、一クサイ…」など、計17種の形容詞接尾辞をあげているが、この中でも、今日なお生産的であると見られるのは、5種ぐらいである。

総じて、現代日本語においては、形容詞を新しくつくり、ふやすということが、きわめて困難になっていると見なければならぬのである。

ところが、形容動詞の方では、和語に限っても、

- 1 一か、一やか、一らか などの接尾辞添加
- 2 名詞＋居体言 人騒がせ、へそまがり
- 3 居体言 きらい、好き、たくみ、まし
- 4 居体言＋名詞 見事、(勝ち気)
- 5 音象徴語 めちゃくちゃ、ばらばら
- 6 副詞 もっとも、あやにく、あんまり
- 7 成句 矢つぎ早、やぶれかぶれ
- 8 名詞＋形容詞語幹 中高、腰弱、(気短)
- 9 居体言×2 とりどり、こりごり
- 10 形容詞語幹＋居体言 安上がり、軽はずみ
- 11 名詞＋形容詞語幹＋接尾辞 一人よがり、口惜しげ
- 12 名詞＋形容動詞 くそまじめ、物静か
- 13 形容詞語幹＋形容動詞 (ありがたい迷惑、うす馬鹿)
- 14 名詞×2 色々、様々
- 15 名詞 罪、うつろ、蓮(っ)葉
- 16 形容詞語幹＋名詞 うす手、太っ腹

17 居体言+形容動詞 負けざらい

18 居体言+形容詞語幹 待ち遠

等々、ほとんどあらゆる語類（品詞）からの転成が可能であり、またあらゆる組み合わせによって成立するようである。しかも、ほとんどすべての型が、現在も生産的である。加えて、漢語・洋語の形容詞・状態言が、一ナ、一ダ、一ニなどを付せられると、そのまま大量に形容動詞として用いられるわけであるから、現在、異なり語数としては形容詞をはるかにしのぐ結果になるのはきわめて自然なところである。

冒頭に述べたように、形容詞はきわめて截然とした外形をもつ語類であるが、基本的なものは古代において形成されていて、新しい求めには外来成分をもって応ずるといのが、大勢となっていて、そのために、新しく形容詞を生み出すことが、今日のわれわれには極端に困難なこととなっていると見られるのである。

IV おわりに

小論では、現代日本語の形容詞がもっているおもな問題について考えてきたが、質量両面にわたるさらに深い考察の必要が感じられる。とりわけ、形容詞の意味分布、形容動詞との関連、それらの通時的考察などについては、一層詳密な分析をしなければならぬと思う。

注

① 「語形と語性」（『日本語と日本語教育——文法編——』文化庁 国語シリーズ別冊2）

② 泉井久之助「言語構造論」77ページ

③ 大野 晋「基本語彙に関する二、三の研究」（『国語学24』所収）ただし、合計欄の24,167は正しくないために、24,161に改めた。

④ 同上大野論文

⑤ 「国立国語研究所報告 13『現代語の語彙調査 総合雑誌の用語 後編』」81
ページ

なお、「同研究所報告 25『現代雑誌90種の用語用字』」は品詞区分の方法が特殊であるため、この場合はよりどころしなかった。

⑥ 「普通話三千常用詞表」（1959年、北京、文字改革出版社刊）による。

⑦ L. FAUCETT & 牧一「英語重要単語統計的研究」による。

- ⑧ 前掲⑤の『現代雑誌90種の用語用字』第一分冊「総記および語彙表」中の「第2表 使用率順語彙表(全体)」による。第100位までに掲げられている「——的 28」および「——タイ 73」の2成分は除外した。
- ⑨ 前掲⑦に同じ。
- ⑩ B. Q. MORGAN : German Frequency Word Book による。
- ⑪ George E. VANDER BEKE : French Word Book による。
- ⑫ 前掲②「言語構造論」39ページ以下
- ⑬ 森田良行「動作・状態を表わすいい方」(『講座日本語教育』第4分冊, 早稲田大学語学教育研究所, 1968)
 国立国語研究所 西尾寅弥「形容詞の意味・用法の記述的研究」のうち, とくに6ページ~19ページ
- ⑭ 「国立国語研究所資料集 6 『分類語彙表』」の「まえがき」にある「中心の七千語」を私に簡称した。
- ⑮ 大西雅雄「国語科学論考」中の「国語教材の統計的研究」による。
- ⑯ 前掲③の大野論文によれば, 万葉集において, 形容動詞は75語(全語数の1.0%)用いられていることがわかる。また, 万葉・枕・源氏・徒然の4作品に共通する815語のうち, 形容動詞は13語(1.6%)で, ことごとく和語であることもわかる。
- ⑰ 「品詞別 日本文法講座 5 連体詞・副詞」の巻末の一覧では, 「明解国語辞典」と「角川国語辞典」をもとにして調べられた連体詞があげられているが, 両辞典に採録されているもの54語, 「明解」のみのもの43語, 「角川」のみのもの11語で, 都合108語である。
- ⑱ ここで, 「きわだって多い」としたのは, 全語数と形容動詞総数の2種の語数との関連で目立つ, という趣旨である。
- ⑲ 前掲『分類語彙表』の「まえがき」5ページには「(3.)の類83項」とあるが, これは本文の項目数から, 明らかに「84項」と訂正されるべきである。